

# 万葉の川心

横浜市教育委員会  
東部学校教育事務所  
澤井園子

七夕の歌一首 併せて短歌

(巻第十七 四二二六番歌)

天の川 橋渡らせば その上ゆも

い渡らさむを 秋にあらざとも

右は、七月七日に天漢を仰ぎ見て、大伴宿禰家持の作

「あれから、もう一年だね。なんだか早かったなあ。」転勤してきた同期仲間とそんな会話を交わした。あれというのは、偶然帰り道に一緒にになり、暖簾をくぐったあの日のことだ。アルコールも入り、仕事について、腹藏なくじくり話した。この道につく前の自分、がむしゃらに進んだスタートの頃、まさに今現在の立場。そして、一寸先の闇か光かわからない先についても語った。同じ匂いを感じていながら確信を持っていないことも、思い切つて話してみた。かなり近い考えだったことに心から安堵した。飾らなくていいと思えたからかもしれない。若い時は、別に飲まなくても昼間話せば良いのではと思つていたこともある。場を変えて、明かりが落ちて語れることがあり、夢や浪漫が夜、静かに開くことを心地良く感じるようになってきたのは、重ねてきた歳のおかげだろうか。

五年十年と、節目の時に人は振り返る。創立の思いに触れること、初心を思うことでまた力が湧いてくる。重ねてきた喜びと苦難とを自信に変えることができる。何よりもお世話になった方々や仲間との語らいが、あらためて



富山県高岡市米島大橋

この先進むべき道を示してくれる。

「天の川に橋をかけてあつたならば、その上を通つて渡つて行かれるだろうの。秋ではなくとも。」中国から入つてきた七夕の物語に魅かれて、万葉集にも「天の川」の歌が多くある。年に一度しか逢えない切ない物語は二十一世紀の今もずつと語り継がれている。「天漢」の「漢」とは「漢水」で長江の一支流を示している。天にある大河、すなわち天漢に橋があつたならばと、直前に載せてある長歌を受けてこの歌は詠まれた。宇宙にも河がある。暗闇の中の光の束を河と見るスケールの大きさにまず心打たれる。天上で引き裂かれた二人は互いに想い合い、そして、年に一度だけこの川を越えることができる。あなたを想っている、きつとまた会える・・・その望みが今日を生きる力になる。万葉人もまた、切ない恋をしていたのだろうか。会えないけど、でも、愛しい人をずつと思つて待っていたのだろうか。歌碑は、富山県高岡市を流れる小矢部川にかかる米島大橋の欄干にある。

「老若男女、国籍問わず、多くの人が良いと言うのは、結局万人受けを狙つたものではないんだよね。その人が、惚れ込んでこだわつて、突き詰めたものが結局支持される気がする。だから、自分の思うところを信じて進むのがいいんじゃないのか。」そのままの自分でいいと言われた気がした。簡単ではないし、今すぐ出来ることでもないけれど、あきらめず自分らしく流れていこうと思う。次の節目に向けて、また一歩ずつ、少しずつ。「友よ、ありがとう。」